

同窓会会報

高知女子大学看護学部

第4号

平成24年3月25日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



高知県立大学池キャンパス全景 写真提供: 高知医療センター

ごあいさつ

同窓会会長 梶原和歌

同窓生の皆様方におかれましては、それぞれの場でご健勝のことと存じます。昨年は東日本大震災・原発事故と歴史に残る苦難に遭遇した年でした。義援金の活動では同窓会の呼びかけにご協力くださりありがとうございました。復興までまだまだ遠い道のりですが、この厳しい体験を国民みんなが主体的に受け止め、物心両面の支援は無論、価値観を見直し生き方の根源に目を向ける機会となっていく活動を広めましょう。

そんな年の年末、第31回日本看護科学学会学術集会が副学長 野嶋佐由美先生を会長に高知市の4会場で開催されました。メインテーマは、「社会とともに拓く看護の新たな知への挑戦」でした。多くの共感をよび記念すべき学会となりましたので、本会報で特集を組んでおります。

さて、平成24年度同窓会総会は、「第38回高知女子大学看護学会・前夜祭」を兼ねて、会員の親睦と交流を図る楽しい宴にしたいと計画しています。是非、お誘い合わせのうえ、ご参加くださいますようお願い申し上げます。



主な内容

- ①同窓会会長ごあいさつ
- ②第31回日本看護科学学会学術集会報告
- ③学術集会に参加して
- ④高知県公立大学法人設立1周年を迎えて
- ⑤記念式典・祝賀会に参加して～同窓生の声
- ⑥同窓会総会ならびに宴のご案内

第31回日本看護科学学会 学術集会報告

in 高知

第31回日本看護科学学会学術集会が、平成23年12月2日・3日の両日にわたり、日本全国の看護者および看護関係者2,480名の参加を得て高知で開催されました。開催にあたっては、高知県立大学の教員をはじめ、卒業生および修了生、さらに県内の看護職者や学生のボランティアなど多くの方々のご協力のもと成功裏に終えることができました。

会場は、高知県民文化ホール、高知市文化プラザ かるぽーと、ホテル日航高知旭ロイヤル、サウスブリーズホテルの4カ所に分かれて、会長講演、基調講演、シンポジウム、口演・示説発表、交流集会など、豊富な企画・プログラムにより行われました。2日間の学術集会においては、活発な意見交換や交流がなされ、刺激のある充実した学術集会となりました。本会報では学術集会の様子をご報告いたします。



会長講演

テーマ『看護の知の構築に向けての方略』



学術集会長 野嶋 佐由美

会長講演は、中山 洋子先生(福島県立医科大学)を座長に、『看護の知の構築に向けての方略』をテーマに行われました。

「看護は専門職か?」「看護学の価値は?」という問いに出会ったのは、40数年前であった。そのころは看護系大学もわずかであり、もちろんパソコンもなく、やっとコピー機械が普及し始めたばかり、看護系雑誌の数も少ない時代であった。その後、科学や社会の発達とともに、看護系大学は200校となり、大学院修士課程を有する大学131校、博士課程を有する大学62校と発展を遂げている。

さらに看護界が力を合わせて、日本看護系大学協議会(1974年)、日本看護系学会協議会(2001年)などを設立し、活動を積み重ねてきた。これらの活動の積み重ねが、日本学術学会看護分科会の設置(2005年)へとつながり、重要な看護をリードする見解や提言が、看護界のみならず社会に向けて発信されるようになり、看護の価値も高まってきている。しかしその一方で、「看護は専門職としての自律性を確立しているか?」という問いについては、今なお、われわれの前に立ちほだかり続けている。

看護学の基本的な知のパターンについて、Carperは1970年代後半に、「経験知」「倫理知」「審美知」「個人知」として明示している。このような考え方について、看護学の発展には、看護理論、看護研究、看護実践、看護倫理のそれぞれが発展していくこと、そして、それらが循環的に関連し合って発展していくことが重要であるとする。

看護学の知の発展の志向性は、脆弱性を抱えている人々へのケアリングを通して「社会と共にあること」が前提である。このような看護学の知の発展を具現化し、さらに一步一步と深化させているのが看護系学会の使命であり、それぞれの専門性を基盤とする学術学会活動があるとする。

知の発展は、確立と変容と再構築を繰り返し、次に伝承されていく。したがって、看護教育のなかで、この知の発展のメカニズムを、科学や社会の文脈の中で伝えていくことが求められる。

看護学の知のパターン、看護学の知の構築の核となるものは、看護に対する価値や哲学であろう。それゆえに、一人ひとりの看護職者が、看護の価値をしっかりと内在化させ、看護者としてのIdentityを確立していくこと、あるいは各自の看護哲学や看護観を確立していくことが重要であり、その結果として、看護の自律性を確立する軌跡に至ると考える。



基調講演 南裕子先生

基調講演は、太田 喜久子先生(慶応義塾大学)を座長に、『グローバル化のなかでの看護学のあり方』をテーマに行われました。



南 裕子(高知県立大学長)

2011年4月1日に日本は国民皆保険制度発足から50年を迎えた。この半世紀のなかで、日本の平均寿命は世界一となり、乳幼児や成人の死亡率が著しく低下するなど健康指標の大きな改善は常に世界の注目を浴びてきた。

しかし、国民皆保険が導入された当初から1975年ごろまでの改善のスピードに比べ、それ以後の改善は世界と比較すると鈍化しているように見える。少子高齢社会の到来、大規模自然災害の多発、疾病構造の変化、政治経済の不安定さなど多くの要因が考えられるが、同時にグローバル化の進行も大きな背景となっている。

今後我が国の健康環境を改善するためには、世界規模で、地球規模で健康課題とその対策を考えなくてはならないと考える。このような世界の動向と看護学の現状を分析し、課題を整理し、今後の対策について述べたい。

1. 世界の健康と対策の動向

我が国の戦後の保健の動向を世界の動向と比較しながら、これからの課題を展望する。

2. 国際政治経済と健康対策の関連

世界の健康課題は、国際政治経済とは切り離せないものである。世界銀行、WHOを含む国連、各国の国際支援活動、国際的なNGOはさまざまな連携・関係のもとに世界の健康問題に取り組んでいる。看護職に関連していえば、世界の看護職供給のバランスの悪さと対策、たとえばEPAのような制度が看護と看護学に何をもたらすかを考える。

3. 看護学のグローバル化

看護と看護学のグローバル化は、当然の現象であるが、日本における看護学のグローバル化は、決して世界のスピードについていっているわけではない。ここでは、看護学教育と高度実践看護師制度に焦点を当てて、概観する。

4. 科学者コミュニティの動向と世界の健康対策

世界でG8が開催されると、併行して世界の科学者コミュニティが学術の立場からG8に向けた提言をしている。日本学術会議を通して見える科学者コミュニティの使命を考える。

5. 世界看護科学学会等、国際的学会を立ち上げる意味について

日本から看護学の学術的な発信はさまざまな方法で行われている。JANSの英文誌をはじめとする学術論文の発信は最近活動が活発になっている。一方では、看護学全体から見れば、世界の科学者コミュニティのような組織化はやっとその緒についたばかりである。ICNとWANSの役割の違いなどを比較しながら、今後の課題を整理する。

6. 看護学を育てる人材の育成に関する課題と対策について

日本では急速に看護系大学が増加し、大学院も131となった。看護科学者を支える体制は強化されつつあるが、多くの課題が山積している。



シンポジウム

シンポジウムは、3つのテーマで行われました。

◆シンポジウムⅠ ケアとキュアの融合を基盤とする看護実践の発展

シンポジスト: 「看護教育・制度の視点から」 井上 智子(東京医科歯科大学大学院)
「チーム医療の視点からーがん緩和ケアを多職種チームで実践するー」
田中 桂子(がん・感染症センター都立駒込病院)
「ケア・プロトコール開発の視点から」 野末 聖香(慶応義塾大学)
「看護管理の視点から」 佐藤 エキ子(聖路加国際病院)
座長: 正木 治恵(千葉大学大学院) 藤田 佐和(高知県立大学)



井上氏は看護教育・制度の視点から「ケアとキュアの融合を基盤とする看護実践の発展」とは、看護の役割拡大を目指すものであり、チャンスでもあると述べ、田中氏はチーム医療の視点から、がん緩和ケアの実践より他職種チームのあるべき姿とそこに活かされる看護実践について述べ、野末氏は精神看護分野でのケア・プロトコール開発のプロセスとその課題から今後の方向性について述べ、最後に佐藤氏は看護管理の視点から、リソースナースに対する看護管理者の役割期待及び支援について述べられました。それぞれが志向するケアとキュアの融合を基盤とした看護実践の発展性について語られました。

◆シンポジウムⅡ 新たな知の構築に向けて進化する看護研究方法

シンポジスト: 「研究方法開発の視点から」 川口 孝泰(筑波大学大学院)
「質的研究方法の視点から」 戈木クレイグヒル 滋子(慶応義塾大学)
「介入研究方法の視点から」 堀内 成子(聖路加看護大学、聖路加産科クリニック)
座長: 田中 美恵子(東京女子医科大学) 時長 美希(高知県立大学)

川口氏は研究方法の開発の視点から、看護研究の多くは看護実践の向上のためにどのように役に立つかについては見えにくい状況であると述べ、看護学が実践の学としてどのように「見える化」を果たしていくべきかについて述べられました。戈木氏は、質的研究法の視点から質的研究によって導き出されたエビデンスを統合する試みがこれまで以上に重視されていると述べ、さらに良い研究を増やすための小さな進化が必要とされているのではないかと述べられました。また、介入研究方法の視点から、堀内氏は、科学技術の進歩により看護実践の有効性を示す研究が現れ始めたことと述べ、このような介入研究には段階を追った研究プロセスが必須であると述べられました。このように、新たな知の構築に向けた様々な取り組みが語られました。



◆シンポジウムⅢ 社会に向けた看護の価値の可視化

シンポジスト: 「当事者の立場から」 松本 陽子(NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会)
「移植看護学会の立場から」 林 優子(大阪医科大学)
「看護の経済的な価値(Value)を説明する」 田倉 智之(大阪大学大学院)
「チーム医療の中で看護がみえるということ」 内布 敦子(兵庫県立大学)
座長: 岡谷 恵子(近大姫路大学) 中西 純子(愛媛県立医療技術大学)

当事者の立場からは松本氏から看護の価値の可視化は患者の受益に通じると述べ、移植看護学会から林氏は新たな領域である移植看護の価値を見えるようにすることの重要性について述べ、田倉氏は経済的な価値の視点から看護を解析し、最後に内布氏はチーム医療の中でいかに看護が価値を発揮しているかについて述べられました。それぞれが異なった立場から看護の可視化についての重要性について討議されました。

教育講演・特別講演



教育講演は、3つのテーマで行われました。

- ◆教育講演Ⅰ 国民の生命と生活を守る看護からの政策提言のあり方
- ◆教育講演Ⅱ 社会のニーズに対応する看護の開拓
—日本難病看護学会の活動を通して—
- ◆教育講演Ⅲ 日常性の中で尊厳を守る看護倫理

教育講演Ⅰでは、国民の生命と生活を守る看護からの政策提言のあり方として、田村氏から、現在の震災後のこれまでにない危機的な状況下にある日本において、健康また保健福祉にかかわる政策提言がどのようなプロセスを踏んで決定されていくのかについての関心を寄せることは看護職者にとって重要なことであり、ここに多くの研究者の研究成果が投入されなければならないとし、そこにかかわる一員として今まで以上に積極的な提言が必要であると述べられました。また、教育講演Ⅱでは、社会のニーズに対応する看護の開拓について、日本難病看護学会の活動を通じ、川村氏より、学会活動としての研究成果の多くが、日本の難病対策に活かされてきたことと、このような学会の運営は、利用者自身が実践している医療看護を活用して開拓される療養生活と、同時にそれを支える看護の開拓を一体化・立体的に論じる場を提供していると述べられました。教育講演Ⅲでは、日常性のなかで尊厳を守る看護倫理として、片田氏より、日本看護科学学会のこれまでの看護倫理への取り組みから、そこで問われてきたものは常に看護実践であり、いかに看護職者が自律し自立した立ち位置を持って責務を果たしていくことができるのか、裁量権などが問われる今その重要性および方法についての検討が必要であると述べられました。

特別講演Ⅰでは、山折 哲雄氏(国際日本文化研究センター名誉教授)による「日本人の死生観とケア」というテーマで講演がありました。先生は、3.11の直後、被災地を訪れたことや、阪神・淡路大震災直後に人々が深い喪失感により心的外傷後ストレス障害(PTSD)を体験したことをふまえ、人々が「心的トラウマ」を解消する術として対人関係に基づくものと、死者や他者との魂との出会い、すなわち目に見えない『対魂関係』を通して、解消することについて話されました。そして現代人は目に見えない魂の出会いに無自覚であることから、もっと「鎮魂」の歴史に目を向ける必要があるのではないかと問いかけられました。



山折哲雄氏

日本看護科学学会が設立されて30年を迎えました。

30周年記念講演では、村木 厚子氏(内閣府)に支えること、支えられることというテーマでご講演いただきました。



村木厚子氏

特別講演Ⅱでは、木村 幸比古氏(幕末維新ミュージアム霊山歴史館学芸課長)による「坂本龍馬の世界観」という地元にちなんだテーマで講演がありました。講演では、龍馬のビデオを流しながら、龍馬の幼少期、武士の教育、脱藩当時の様子、女性観など巧みな話術で龍馬の世界を語っていただきました。



木村 幸比古氏

市民フォーラム・Nursing Science Cafe



高知城

13:30～15:30市民フォーラム
南海地震 来るべき災害に備えて
～いのち、くらし、こころを守るために～

講師:石井 美恵子(日本看護協会看護研修学校
災害支援ナース現地コーディネーター)
大川 貴子(福島県立医科大学)
司会:リポウィッツ よし子(青森県立保健大学)
永井 優子(自治医科大学)

東日本大震災の発災以来、政府では、南海地震だけでなく、連動が想定されている南海トラフの巨大地震について検討しています。市民フォーラムでは、実際に東日本大震災での看護活動をしている講師から、大規模な震災から命を守り、避難をするだけでなく、その後の長期にわたる復興に向けた生活を含めた備えやこころのケアを含めた震災後の生活の再構築に向けて看護学の立場から講演がなされました。

ナーシングサイエンスカフェの様子



中高生を対象により看護についてより理解を深め、最新の看護に触れてもらう場としてナーシングサイエンスカフェが開催されました。50名近くの高校生、中学生が参加して熱心に聴き入っていました。

先駆的な看護活動や命やくらしに危機が迫ったときの看護活動として3名のエキスパートナースの方々のお話を伺いました。
「小児専門看護師の活動」 三浦由紀子さん(学部46期生/修士8期生)
「ヘリコプターによる災害、救急看護」 岡林 志穂さん
「災害時の看護活動」 佐藤 直子さん

学会会場の様子



受付の様子



県民文化ホール



高知市文化プラザ
かるぽーと



会場間をつなぐ
シャトルバス

口演発表
示説発表



口演発表での
質問風景



学生ボランティア



追手門からみた高知城

多くの学生・
院生がボラン
ティアとして
活躍してくれ
ました！



懇親会の様子



理事長より
ごあいさつを
いただきました

小松浩子 日本看護科学学会理事長



ご祝辞をい
た
だ
き
ま
し
た



尾崎正直 高知県知事



正調バージョンと
リズムカルな現代版
よさこい鳴子踊りが
披露されました

お酒をはじめ
土佐ならではの
飲み物の数々・・・





学術集会に参加して



川西千恵美（学部26期生） 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部保健科学部門看護学講座

高知女子大学から、高知県立大学となった記念すべき年に野嶋会長のもと開かれた第31回学術集会に参加しました。大変興味深いプログラムが数多くありました。係もあったので、参加できた中では、どんな時も好奇心を失わず、人を信頼し、信頼されている村木さんのお話しは心に染みしました。南学長のご講演では、自分の身近なこと、日本のことだけ考えてはいけなさと強く感じました。毎回刺激を頂いて、一瞬にして大学時代にかえる、初心に戻る機会となっています。

初日の夜に開かれた懇親会では、とてもおいしい高知ならではの食事が提供されていました。来賓の方々からの笑いあり涙ありのスピーチを聞きながら、懐かしいアイスクリン、高知産の様々なジュース・カクテルを頂き、本当に楽しい一時でした。

高知は、やはり温かでした、天気も、人も。いつも母校を誇りに思っていますが、さらに強く感じた学会でした。関係した皆様から感謝申し上げます。

植田喜久子（D2期生） 日本赤十字広島看護大学看護学部

日本看護科学学会第31回学術集会の成功をお喜び申し上げます。野嶋佐由美先生のリーダーシップと高知県立大学の教員の全員力の賜物だと実感しました。学会では、企画委員や会場係の役割を担うとともに、交流集会の発表、一般口演の座長という貴重な体験に感謝致しております。

学会では、全国から看護職が参集し、看護を語りあう姿に、知的好奇心も高まりました。また、卒業生が「大学院で学んでいます。覚えていますか？」と挨拶にきてくれ嬉しい再会でした。懇親会での「かつおのたたきラーメン」に驚嘆し、日曜市では手ぬぐいが似合う高齢女性、きれいな文旦、真っ赤なフルーツマト、淡い茶色の新生姜に目を奪われながら歩きました。自然の大きさや大切さに触れました。高知での開催という醍醐味があります。高知県立大学が看護界のリーダー的存在であることに修了生の1人して誇りに思うと同時に、自分自身が看護の新たな知へ、どのように挑戦するのかを課題として取り組みたいと思います。

吉本知恵（学部29期生・D4期生） 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

第31回日本看護科学学会学術集会に企画委員として参加させていただきました。母校の先生が会長を務められる27年ぶりのこの学術集会に関わることができましたことを同窓生として嬉しく思います。学内で学術集会の具体的な準備に当たられた先生方は本当にお忙しかったことと思います。私は、全国レベルの学術集会に委員として携わるのは初めてであり、会議や役割を通して様々なことを学ばせていただきました。また、同窓生の先輩や後輩の方々との出会いもあり、そして当日、「こんな素敵な会場で発表させていただけるの？幸せだわ！」「さすが高知ね、すばらしかったわ！」と参加者の方から学術集会に満足したお声も聞くことができました。このような貴重な経験をさせていただきましたことに感謝申し上げます。



升田茂章 高知県立大学看護学部

2011年12月2日、毎年一参加者として参加していた日本看護科学学会に、実行委員として参加させていただきました。私にとっては、初めての経験ばかりで、矢継ぎ早に進んでいく状況に戸惑うこともありましたが、先生方、先輩方からご助言をいただきながら、なんとか当日を迎えることができました。

学会当日は案内係として、特に県外の参加者の皆様の問い合わせに対応させていただきました。その中で、私は思いがけず新たな高知の一面を知ることとなりました。特に、高知出身でない私は、地理的な面で高知県立大学のボランティアの学生さん達の力におおいに支えられました。物怖じせず積極的に参加者の皆様とコミュニケーションをとる学生さん達に、大学では知らない一面を見、そして力強さを感じました。このように、今回の学会は卒業生や修了生、そして在学中の学生さん達、スタッフとして尽力される同窓生の皆様の絆を改めて感じられる機会となりました。この経験を生かし、今後も学部同窓会発展に微力ながら努めていきたいと思っております。



小澤 若菜（学部43期生・M11期生） 高知県立大学看護学部

学会開催中は、同窓生の皆様から心温まる声をたくさんいただきました。本当に、ありがとうございました。学会の機会に、帰高された同窓生の方からは、会場間のシャトルバスのなかで、はりまや橋から大橋通り、高知城といったお城下の様子を懐かしく眺めることができ、楽しかったというお話を聞きました。会場が数カ所に分かれていたため、ご不便をおかけしましたが、2400名を超えるご参加をいただけたのも、同窓生の皆様のご協力・ご支援あつてのことと思います。また、示説の会場で、ナーシングサイエンスカフェに参加した高校生たちが、発表者へ熱心に質問をしていた姿が印象的でした。高知の地元に根ざした学会として、坂本龍馬から乙女姉やんへの手紙のように、「エヘン(えっへん)、エヘン(えっへん)」と得意満面に同窓生の皆様にお便りできることを嬉しく感じます。

高知県公立大学法人 設立1周年を迎えて



平成23年4月1日に看護学部は、「高知県公立大学法人 高知県立大学 看護学部」となり、1周年を迎えることになりました。

大学では、法人設立記念事業として、平成24年2月23日、城西館にて高知県公立大学法人設立記念式典ならびに祝賀会を開催いたしました。式典には文科庁長官、高知県知事、高知県立大学及び高知短期大学の関係団体、県民、法人教職員など多数の方々の参加がありました。

第1部 記念式典

記念式典の開会にあたり、南裕子理事長より式辞があり、高知県立大学法人は、昭和19年12月の高知県立女子医学専門学校設立認可に始まり、60年余りの歴史と伝統を経て高知女子大学から平成23年4月1日に法人として設立され、大きな変革を遂げることができたと話されました。さらに大学は、時代の変化に対応できる運営を行い、地域社会に貢献できる有意な人材を輩出することを目指し、教職員が丸となって地域の人々に頼りにされる大学づくりを目指してまいりたいとお話がありました。

尾崎正直高知県知事より記念講話があり、つづいて近藤誠一文化庁長官より、「大震災、日本の文化、そして大学の役割」をテーマに記念講演が行われました。



式辞をされている南裕子 理事長



尾崎正直 高知県知事



近藤誠一 文化庁長官



高知県立大学校旗
(後方のエンジ)
および高知短期
大学校旗
(手前のブルー)



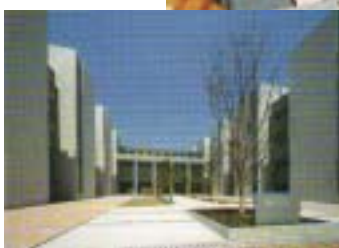
今西先生を挟んで
熱心に聴き入っている
両山崎先生

5名の卒業生により「私が大学に期待すること」をテーマにトークが行われました。

トップバッターとして看護学部からは、梶原和歌同窓会会長がマイクを持ち、少人数教育ならではの教員と学生、学生間のつながりの深さを語られ、信念をもって看護専門職として今日まで現役で活動してこられた様子をその当時を垣間見るかのように話されました。



マイクを持ちトーク中の
梶原和歌同窓会会長



第2部 祝賀会



第2部の祝賀会では、南理事長の開宴の挨拶に続いて、来賓を代表して相良祐輔高知大学学長、永尾朱美しらすぎ会会長より祝辞がありました。その後、マンドリンクラブの学生による演奏、グローカルクラブ(Japarean)の学生によるよさこい演舞が披露されました。

宴では、学部を越え、卒業生、修了生、先生方との懐かしい交流がなされました。祝賀会の最後に参加者一同が会して記念撮影を行いました。



記念式典・祝賀会に参加して～同窓生の声

池田恵美子（学部30期生，修士9期生）

高知県立大学の法人化記念式典において、関係各位のお話を伺いながら、卒業してから随分と長い月日が経過したにも関わらず、学生時代の刺激的な学びをまるで昨日のことのようにはっきりと覚えていることに驚きました。大学での学びは、現在の私の価値観を支えています。変わらぬものと変えていくべきものを見極め、自己変革しながら、常に社会のニーズに応じていこうとする母校の気概を誇りに思います。今後も、県民から親しまれ必要とされる大学として発展していただき、いつの時代にも卒業生が還る場所として、開かれていて欲しいと願っています。

村田久美子（学部51期生，修士13期生）

高知県公立大学法人設立記念式典に参加させて頂き、改めて自分の母校であり、現在通っている大学の歴史の重みを感じました。歴史ある大学での生活の中で尊敬できる先輩の活躍される姿を見れたからこそ、なりたい自分像を描けたのだと思います。そして、学ぶ楽しさ、仲間と助け合いながら考え抜くおもしろさを教わっていたからこそ、大学院に進学し、さらに学びを深めたいという気持ちが芽生えたのだと感じました。

嶋岡暢希（学部38期生）

去る2月23日、高知県公立大学法人設立記念式典が開催されました。南学長先生の式辞をはじめ、記念講話・記念講演を拝聴し、これまで高知女子大学が築いてきた歴史と、今後高知県立大学が目指していく姿を明確にすることができました。また、卒業生トークはどのお話も引き込まれる内容で、大学における学びから生涯の学びへの発展、学びを通じた人と人とのつながりのすばらしさを感じることができました。この式典を通し、大学教育が多くの同窓生に支えられていることを再認識する機会となりました。

松澤大二郎（看護学部1回生）

本学の共学化、法人化の初年度の入学生として、このような記念すべき行事に出席させていただいたことをとても光栄に思いました。近藤文化庁長官による講演があり、私には少し難しい内容もありましたが、卒業生からのお話や高知県知事の今後の高知県内の生涯教育や大学教育に関する熱意あふれる講話には、私達が期待をされているように感じ、高知県に大きく寄与できるよう、学生なりにより努力しなければならないと感じました。また、行事全体を通じてこれからあるべき県の公立大学の姿を知ることができ、地域と大学が協働し、よりよい人材輩出のためのさらなる連携に期待したいと思いました。

同窓会総会ならびに宴のご案内

日時:平成24年7月14日(土) 18:30~20:30

場所:得月楼(高知市南はりまや町 1-17-3)

会費:6,000円(同封の振込用紙にて納入して下さい)

参加申し込み:同窓会事務局 Fax:088-847-8750

(締め切り:6月30日)



ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。(敬称略 平成24年1月20日現在)

正会員

坂元 志保子(4期生)	岡田 湊子(7期生)	山崎 登代子(17期生)	田中 雅子(18期生)
近澤 範子(20期生)	飯沢 由里香(26期生)	山田 薫(26期生)	北川 里佐子(27期生)
林 美智子(35期生)	生藤 多嘉子(35期生)		

東日本大震災 災害義援金の活動の終了について

東日本大震災への災害義援金は、前回取りまとめを行った平成23年4月20日以降平成24年1月31日までに、延べ12名の同窓生の皆様から120,000円をご協力いただきました。義援金は日本看護系大学協議会を通して被災地にお送りしましたので、ご報告いたします。

災害から早くも1年が経ち、復興にはまだまだ時間を要しますが、本同窓会の災害義援金の活動は、平成24年3月末を以て終了とさせていただきますのでご了承ください。これまでにご協力いただきました多くの同窓生の皆様に、心より感謝申し上げます。

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

編集後記
平成23年度を振り返ると、3月11日に発生した東日本大震災をはじめ、大学は4月1日より法人化となり、さまざまな出来事がありました。本会報では法人設立一周年記念式典・祝賀会の行事の皆様にお伝えすることができました。
また、第31回日本看護科学学会の開催では、卒業生、修了生、在学生と多くの方々が結集して、無事に終了し、参加者の心に残る成果を残す学会となりました。あらためて同窓生の絆や力を感じることをできました。
本同窓会は、大学の発展とともにさらに充実した活動をして参りたいと思っております。(森下・池添)

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部
Fax:088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>